

〔教育をめぐる随想・考察〕

大学での学びから保育者へ そして私の今

木村 英美

<はじめに>

私は、平成28年3月に38年間務めてきた公立幼稚園を定年退職した。子どもたちによって繰り広げられる日々のドラマに感動し、また仕事仲間、保護者、地域の方々に支えられ、助けられながら幼児教育に関わることができ、喜びと誇りを持って歩んできた道だった。

園長としての経営の最重要課題は、教員の幼児教育専門家としての資質向上である。近年は20代の教員が増え、多くの教育実習生を受け入れてきた経験から感じることは、幼児教育の知識や理論は知っているけれども、その知識を実践と結びつける力、そして、実践を理論化する力、コミュニケーション力等が育っていないことであった。これらの力は、「生きる力」の一つとして、その芽生えを幼児期に育てておくべきことである。自分が長年関わってきた幼児教育の中で育ててきた若者が、今このような状況であることを憂い、責任も感じている。

I 研究の動機

保育現場においては、子どもの育ちに役立つ援助をし続けようとする実践者を育てることが必要である。遊びによって子どもが育つということは広く知られるようになってきたが、今の保護者は、早期に結果が出やすい知的能力と運動能力の伸長、開発に重きを置いた保育を求めがちである。

学生は、保育者になることに夢や希望を抱き、保育者として社会に役立とうとする意欲を秘めて勉学に取り組んでいると同時に、実習では、彼女らのほとんどが自分の保育における力不足を痛感している。現場からの指摘で多いのは、指導案作成の不備や教材準備の不足や「教材」の幅の狭さである。また、新規採用者は労働条件、力量不足、幼児教育の専門家としての保育者の実態への理解の浅さなど、現実とのギャップを強く感じている。保育者が抱える悩みは、技能面のレベルアップがうまくできないこと、また、子どもの育ちを実感できず、自信をなくし、くじけてしまうことである。その時に、他の教職員からのサポートがなかったり、自分から助言を求めることができなかったりして、離職してしまうケースが多い。

そこで、学生の保育者になりたいという想いを強化・サポートし、自分自身の成長を実感できる授業の在り方、保育者を続けていこうとする学び方について考えたい。

II 研究の目的

養成校の教員の使命は「保育実践力のある学生を育てる」ことである。保育現場でやっていけるといふ自信と不断の努力に対する覚悟、そしてたくましく折れない心を持たせて送り出すためには、どのような授業の工夫が必要かを明らかにすることが目的である。

III 研究の方法

- 1 保育実践力とは何かを考える
- 2 自分自身の学生から保育者への歩み、保育者としての歩みを振り返る

- 3 保育者養成のスタートに当たって、学生の保育に関する認識の実態や、教員として知っておいた方がよいことを探る

IV 研究の内容

1 保育実践力とは

子どもと出会い、その場で子どもの思いを理解して、「場・人・物・こと」といった環境に応じた援助ができることである。そして、環境に応答することで子どもの今を共に作り出していく力であると考え。保育実践力を支える要素には(1)環境に関わって対話し感じる遊び心、(2)幼児理解の姿勢、(3)保育観の形成がある。

(1) 環境に関わって対話し感じる遊び心

学生自身の体験や経験の少なさから、「遊ぶ力」「遊び心」が低下している現状がある。実際の現場は、それぞれの保育者の知識やスキルに合わせてはくれない。逆に、知識があるゆえに威圧的管理的に引っ張りすぎてしまう傾向もある。そこで、遊びの過程でその構成要素である「場・人・物・こと」間の関係を構造的に把握し、それらを操作しながら子どもがより良く育つ環境を考え作り出していけるような体験をさせる必要がある。体験によって、自分の感性がとらえた環境と対話する能力が身につく、それが「遊び心」を回復させることにつながる。そして、自分が感じた楽しさや充実感といった遊びの感覚は、少しずつ子どもや他の保育者にも伝わっていくようになって考えている。

(2) 幼児理解の姿勢

幼児理解とは、幼児の気持ちに共感しながら、安心感を持って夢中になって遊ぶ姿を評定できる力である。「保育は幼児理解に始まり幼児理解に終わる」と言われる。授業で、幼児理解に関して事例の読み解きをする、正解を求め、何が正しいのかとすぐに聞いてくる学生が多い。自分が体験していない事例から、幼児を理解することには困難な面があることは分かる。しかし、保育者には、子どもの姿に現れた達成感や満足感とそこに至れないための回避、成功と失敗、自由と拘束といった心の揺れ動きを認め、共に感じることを貫く立場が求められる。

幼児理解の姿勢で大事なことは、想像力を働かせ、自分で気づき考えることである。子どもと関わる実際の場面で自分の働きかけが子どもの心に響かなければ、自分のとらえ方が違うと直感的に感じ、その過程で内容を修正したり試行錯誤したりすることで、保育者としての力が育っていく。

(3) 保育観の形成

保育観は、「理論と実践の一致」を絶えず繰り返すことにより自分自身の中に育ってくるものである。子どもに何を育てるための営みなのか、どのような保育者になりたいのかを常に意識しながらふるまうトレーニングを行い、無意識にふるまえるようになるまで訓練する。そして、身につけたことをまず自分の得意な分野を中心に実践することで自信が付き、やがては様々な援助を考えていけるようになる。

2 自分自身の歩みを振り返ることで、「保育実践力」につながるものを探る試み

(1) 学生時代 ～素直に面白そうと思う好奇心～

私の思い出の授業は、入学直後に学んだ児童学科教員全員による児童学の入門的な科目であった。専門分野の奥行きの高さと先生方の個性的ともいえる人柄、そしてその多様さにただ驚くばかりであり、一人ひとりの先生の語り方や話の内容が素直に面白そうと感じた。

津守眞先生の保育学は、先生ご自身が保育者として体験されたことを思い返して語られ、独特の雰

困気があった。黒田淑子先生の人間関係学での心理劇は、恥ずかしさや戸惑いからなかなか役になりきれなかったが、同時に自分の気持ちに素直になること、人に応答することの意味を考えるようになった。専門科目の授業は興味深く、2年間の幼稚園、肢体不自由児施設等でのボランティアの実習体験を授業の「児童臨床学演習」として単位を認めてくださったことはありがたかった。いろいろな子どもとの関わりから、子どもが本来持っている「自ら育つ力」を信じることの大切さや、保育者は子どもに何かをしてあげるための存在ではないこと、子ども自身が自分でできたと実感するような援助をすることを学んだ。それは今に通じる私自身の保育観の中心をなすものである。4年生で、心理劇の大家・松村康平先生のゼミに入り、いざ卒論・就職となっても大学が丁寧に面倒を見てくれるわけでもなかった。学生の自主性に任されており、自分で何とかしなければならない時代であった。ゼミ仲間とは、保育事例について分析・考察し、論議し続けた思い出がある。

様々なことに興味を持ち、関心のあることにはじっくり時間をかけて取り組み深めていくことに価値があること、実際の保育の基礎基本となるものを学んだ学生時代であった。

(2) 私の20代 ～幼児理解の深まりと広がりをめざしながら～

分からないことが分かる楽しさは、新規採用となった園の先輩たちの仲の良さと幼児を見る目、保育技術の高さから学ぶことが多かった。先輩からの「あの子たちの楽しんでいることは？」という問いに、自分の言葉で語れないもどかしさもあった。けれども、それが今の私の実力なのだと思い知った。幼児理解は、途中経過の時点では分からないけれども、当事者の関係性が良い方向に変わった時にその理解の仕方が妥当だったといえるものである。そして、保育観を確かなものにしていくための方法として、軸となるのは「理論即実践、実践即理論」である。つまり、子どもと素直に向き合う、そこで感じたことを自分の言葉で日々反省評価として記録に残すということであった。その時の記録は今もなお貴重な宝として残してある。

現場では、子どもの育ちを見続ける責任がある。保育者として自分自身が感じ考えたことを、書き残すことを厭わない気持ちを持ち続けることが重要であると考え。結婚や出産という人生の転機を迎える前に、資質向上というキャリアを確実に積むことが求められる時期であると考え。

(3) 私の30代～40代半ば

～保護者の不安や悩みへの共感性が高まり、子どもと共に生活する・遊ぶ、様々な保育に挑戦～

よく「キャリアは途切れてはだめ」と言われるが、私は核家族で3度の出産をした。この時期は家事と育児と仕事が滞ることのないようにと、自助努力をしなければならない苦しい時代でもあった。長期の保育計画はおろか短期計画もままならず、その日暮らしの保育になることも多かった。かといって、退職するという考えは全くなく、むしろ家族、同僚の応援を受けて今後も仕事を続けようと思いを強くした時期であった。

また、保護者の子育ての悩みを、体験的に共感的に受け止められることが増え、子育てを応援しようという気持ちも強く生まれてきた。特に、大きな障害を抱え特別な支援を必要とするJ君、M子さん、G君との出会いは、一生忘れることができない。そして、「環境を通して」とか「一人一人に応じた」、「総合的に」「個と集団の育ちとは」ということについて、自分が保育を語る時や保育実践の姿に表れているかということを問い続けられた時代であった。また、「木村の異動する幼稚園は、必ず研究発表あり」と言われ同僚からは迷惑がられた。研究発表は確かに辛く苦しいものではあるが、保育者として成長した自分を実感できる絶好のチャンスでもあった。

この年代は、園の中堅として頼られる時期であり、保育実践そのものが楽しくなってくる時期でもある。今までの保育者としての蓄えを基に後輩にアドバイスしたり、自分自身の保育者としての姿を

ありのままに見せたりすること自体が、後に続くものへの指導につながっていくと強く感じた。

(4) 管理職として

～保育を語る保育者になったのか？そして、教職員・保護者への感謝を伝えたい～

管理職となった時代は、預かり保育の充実、3年保育の開始、幼稚園教育要領、保育所保育指針の改訂、子ども園の増加、接続期の幼小連携など、新しい動向に追いつくのに必死だった。不審者対応・災害・アレルギーなどをはじめとする危機管理、モンスターペアレントの出現、幼児虐待、特別な支援教育を要する幼児の増加など様々な立場の人との連携なども課題となった。

しかし、大事なことは、常に子どもの未来を見据えて「今ここでできることを精一杯行う」ことである。そのために行ったことは、時間のある限り担任と一緒に子どもの姿を見つめ、保育のヒントや助言を与えることであった。そして、教職員が常に「子どもたちの未来のために」という同じ目標に向かって努力している姿を保護者・地域の方々に情報発信することであった。「今日のニュース」として、その日のうちに、写真と文章で子どもたちが学んでいる姿をA4判の記事に書き、掲示した。楽しみにしてくださる方が増え、幼稚園への信頼の度合いが高まっていく手ごたえがあった。また、担任の書く週案・反省は、「保育の命」ともいわれるもので、提出後すぐに隅々まで目を通し、遅くとも翌日には返却することを15年間続けた。教員がキャリアを積んでいく時に、誰でもぶつかる壁がある。3年目には、新人だからと甘えることは許されなくなり、10年目には後輩を育てる役割が課せられる。20年目には、園全体を視野に入れて動くこと、管理職への道を進むことも求められる。キャリアに応じてぶつかる壁を悲観しないで、課題を明確にしながらいいてみることで保育の原点が見えてくる。

経営者として、一人ひとりの保育者から信頼され、キャリアを積ませるための指導助言ができる園長でありたいと願い、取り組んでいた。ベテランの教諭から、私のコメントが書かれたひと昔前の週案を見直して自分の保育の軌跡を振り返っているという話を聞くと、地道な努力を続けて良かったと思えてくる。

3 保育者養成のスタートに当たって、学生の保育に関する認識の実態や、教員として知っておいた方が良いことを探る試み

保育者を目指す学生を養成するに当たり、学生の保育に関する認識の実態や、教員として知っておいた方が良いことを探る試みとして、以下のような授業を行った。

(1) 学生がとらえている保育者像（1年生）

「保育者のイメージ」についてグループで話し合いをした。この段階では、外見に関すること（かわいい、エプロンをしている等）、既存のイメージ（子どもが好き、やさしい、お母さんみたい、明るい等）に関する発言が多かった。また、女性社会で怖い、裏表があるなどのマイナス面を含めた意見もあり、保育者としての役割についてはあまり深くとらえられてはいない。職業人として、幼児教育の専門家としての責任や厳しさ、喜び、誇り等にも目を向けるよう指導していく必要がある。

(2) 幼児期の思い出

1年から3年までの学生を対象に、平成28年4月のほぼ同時期に幼児期の思い出を書かせた。各学年の学生の回答の要約は以下の通りである。

- ① 1年生・・・運動会やお泊り保育、発表会などの行事の思い出、遊具や自然、動物といった環境に関する記憶が中心である。また、登園を嫌がって泣いていた時の先生がやさしかった、ほめられた、励ましてくれたなど先生との関わりの場面が記憶に残っているとする記述が多い。

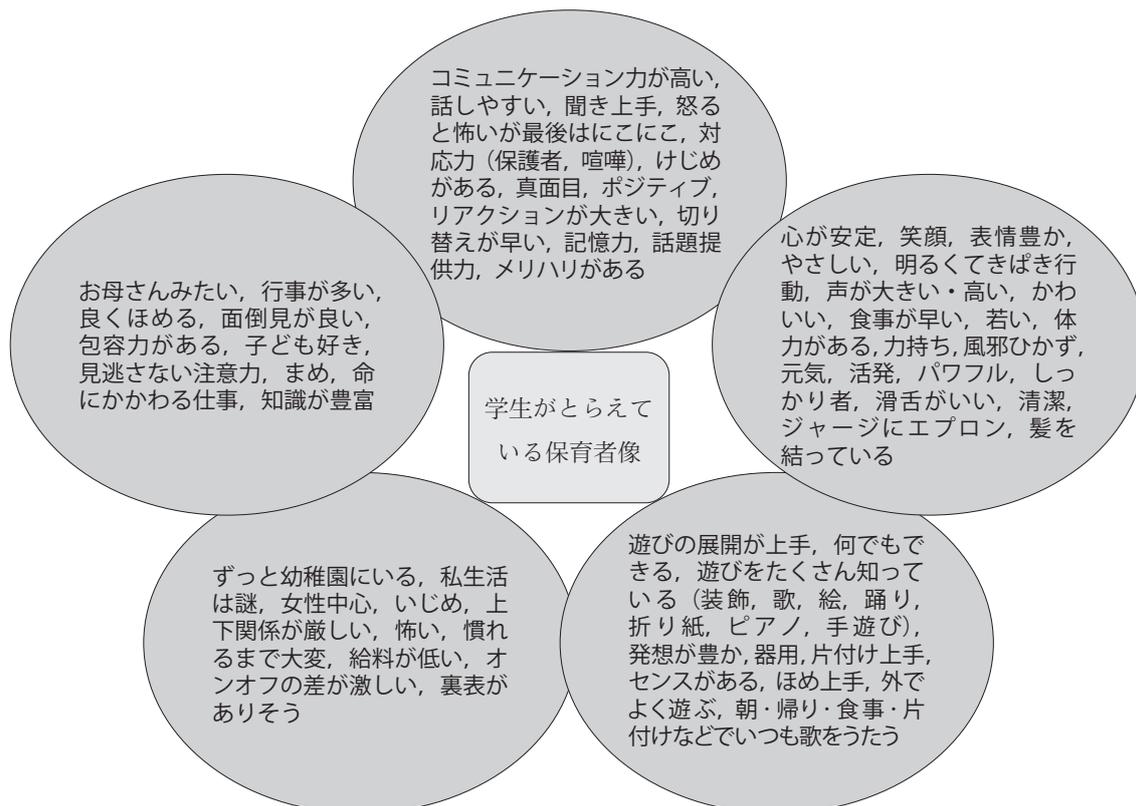


図1 学生がとらえている保育者像（学生の発言を筆者が要約）

- ② 2年生・・・覚えている行事の種類が増え、また、日々の好きな遊び（泥団子づくり、鬼ごっこ、虫取りなどの外遊びや製作など）が多く上がってくる。同時に、苦手な子、障害のある子との関わりが心に残っているとの記述もあった。保育者との関わりでは、ここぞという時に認めてくれた、友達への橋渡しをしてくれたなど、その時の状況や自分の気持ちを思い出しての記述が増えている。また、保護者への励ましや同僚との協働などの観点から保育者を見ている記述もある。
- ③ 3年生・・・内容がさらに鮮明に、詳しくなっている。例えば、劇の役決めて悔しい思いをした時の保育者との関わり、太鼓のフレーズ、寒い日の保育者の肌の温もり・においなど五感を通した思い出の記述が増える。また、園に関わる様々な人の心の温かさを感じるようになっている。

これらのことから、学年が上がるにつれて学びが深まり、一つの行事や出来事がきっかけとなって連鎖的にいろいろなことを思い出し、視野が広がっていく様子が見られる。幼児期の記憶をたどることで、自分が愛され大切に育まれてきたことを改めて感じた学生もいる。特に、保育実習を経験すると、保育者という立場に自分を置いて考えることができるようになる。そして、自分が保育者になりたいと思った動機の確認や、これから自分がなりたい保育者像の原点に気づいた学生も多い。

(3) 4年次の教育実習前に準備しておいた方が良いことを後輩に伝える（4年生）

実習によって、学生は、子どもと遊ぶことだけが仕事ではないといった当たり前のことから、子どもの多様性に気づき、保育者として臨機応変な対応力や優先順をつける能力、判断力、決断力が求められることを痛感する。達成感や挫折感を味わい、反省を活かして自分の力としたいと願う記述や、現場の保育者から教えてもらうという意識から自ら学ぼうとする意識への変容が強調されている記述が多かった。（以下の数字は56名記述のうちの該当の回答数）

- ・事前の教材研究・準備として、絵本や紙芝居などの選定 38
- ・手遊びや素話、クイズなど何もなくてもできること、少しの時間でできること、製作活動、パネルシアター、ペープサートなど保育技術の習得 22
- ・仮の指導案の作成（一斉活動例を考えておく、部分実習で実践したいこと） 20

ほかに、生活リズムを整え、健康管理をしっかりとすることなども挙げられていた。

先輩から後輩に伝えておきたいことには、実習において苦労したことが多く含まれている。これらのことは、授業で伝えてはいるものの、実際に実習直前にならないと自覚できないようである。時間のある時に準備しておく意識を持たせなければならないと改めて感じた。

(4) 教材づくりの実践（3年生）

「環境指導法演習」では、必ず教材作成を行うことにした。教材を自分で作り、自分で試す過程の中で、楽しさや面白さ、手ごたえを感じている様子があった。四季の自然への興味関心を高めるフィールドビンゴや行事にちなんだ製作、壁面装飾も取り上げ、みんなで協力しながら創り上げていく喜びを感じる体験をさせることができた。その後、授業で取り上げたことを実際に教育実習で実践した学生もいて、演習内容を自分のものにしていく姿があった。

(5) 実習の自己・他者評価をするプレゼンテーション（4年生）

授業の中では、学生同士で良かったところを一行ほどの短い文章で評価しあった。努力への共感や共通理解、自己肯定感や自信をうながすねらいがあった。そして、「その子なりの良さを見つけ出す」「取り組みの過程を評価する」といった、子どもに向き合うための視点を持って評価をしてほしいとの考えもあった。

併せて、聞く側の態度の指導にも力を入れた。発表者に向けての温かな雰囲気作りや、まなざしを注ぐことは、保育者にとって子どもへの大切な援助と同質であり、このことを相互に体験することは応答性のある関わり方の実践そのものであると考えるからである。最後の授業では、学生一人ひとりに全員からの評価を取りまとめて返却し、大変喜ばれた。

実習日誌の記録には、特に、「好きな遊びの時間に援助ができない」という記述が多く見られた。生身の子ども前で、意図的計画的に保育を行う経験をより多く取り入れられる場や機会の提供が必要であり、その方法について考えなければならないととらえた。

また、自分自身の成長を感じるとともに現実とのズレに今後どのように取り組んでいくか明確にすることが授業内容として求められていることが分かった。教育実習の課題として共通に挙げた事柄については説明・解説しながら解決の手立てを探った。その例を以下に示す。

- ・部分実習や責任実習だけが保育ではなく、幼児と共に生活することのすべてが保育であり、そこに関わる場所・人・ものの関係に意識を向けること
- ・丁寧な言葉かけとは、言葉を多くかけることではなく、幼児の心を丁寧に読み取り、幼児の心に響く言葉で関わること
- ・全体と個の把握に当たっては、どこで・誰が・どのように遊んでいるのか、把握できていない子どもはいないかを常に意識しながら保育し、保育マップを描けること

(6) 学生の成長ポイントに関わる授業・実習を探る

平成29年度初等教育学科のディプロマ・ポリシーは次の通りである。

V 結 論

私が自分の保育者としての振り返りや授業・研究を通して分かったことを述べたい。

1 間違ふこと、意見が対立することを恐れる雰囲気について

間違いを恐れたり、自分の意見と友達の意見とが同じかを気にしたりする雰囲気を学生同士が醸し出している。

学生全体としては、素直でまじめで、グループで取り組む課題では協調性を発揮する。しかし、授業中の簡単な質問に対しても反応が返ってこなかったり、自分なりの考えを発表することへの抵抗が強かったりする面もある。個々の学生に応じた支援や配慮の必要性があるとはいえ、手取り足取りの大学側の面倒見の良さには正直戸惑いを感じており、学生自身が自分で気づき、考え、行動し、判断する力を身につけられるのか不安を持たずにいられない。

2 「体験の印象は強い」という実感ある授業について

子どもの育ちの側面である5領域（「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」）から幼児の姿を見るのではなく、領域的に分析しながらも総合的に保育を構成・実践することを目指したいと考えている。授業の工夫として、以下の①～④を挙げる。

- ① 豊かな遊びを学生自身が経験し、遊びを面白いと感じる機会を取り入れる
- ② 学生の資質や能力の評価ではなく、自信を持てるように、4年間をかけて長い目で育てる
- ③ 子どもの安心感や気持ちを共に感じ、待つことで遊びを豊かにすることを体験させる
- ④ 「子どもってすごい」と素直に思い、子どもを尊敬できる目を養う

初等教育学科において私に求められている役割は、これらのことを念頭に置いて授業内容を組み立て、現場での体験に基づいた話を多く取り入れて授業を進めていくことであると考えた。

3 後に続く人を呼ぶために就職するという自覚の醸造について

教育実習生が誠意を持って取り組めば、受け入れ先が「来年もぜひ学生を送ってください」と声をかけてくださることにつながる。卒業後の支援として、専門性を高めるための相談・研修を行うことも重要である。学年交流の場や卒業生が現場でしっかりと活躍する姿を見せることによって、後に続く学生がいるという自覚を一層高めさせたいと考える。

VI 今後の課題

1 授業内容の改善充実を図る

方向を示し、手段を考えさせ報告させて、助言を与えながら取り組ませることが重要である。具体的には、①分かりやすい説明や指示をする、②実行させて意欲を高める、③フィードバックする、④要求のレベルを上げるといった授業における指導技術を身につけ、実践することが課題である。

2 養成校の教員が学科として育てたい教師像・保育者像を明らかにし、共通に理解して育てる

再課程認定の機会を活かして、授業内容の共通理解を深め、合わせて私自身の学び直しを必要とする。どの科目や活動においても教員が保育者養成を担っているという自覚や使命を持って臨むことが必要であると自戒の念がある。

3 養成校に求められている課題を検討する

実習に関する課題には、社会人基礎力の育成をはじめ、指導案の作成指導、実習の時期、評価の在り方、受け入れ先の調整・新規開拓、就職につながる支援指導などがある。これらの課題についてどのように取り組んでいくのか、今後様々な視点からの検討が必要である。

4 昭和こども園と連携する

昭和こども園側の思いもあることであり、難しいこともあると考えられるが、園の併設・隣接は、乳幼児期から大学院まで生涯を通した「人を育てる」という大学の特徴的な教育の強みになる。実際の子どもの観察などの実践は、保育者としてのアイデンティティを形成する機会として重要な意義を持つ。座学と実学の繰り返しによって学びを深め、保育の実践力を育むために、さらなる連携を望む。

<おわりに>

さて、今まさに、教育改革の流れが来ている。幼児教育についても、子どもの育ちに遊びが重要であることが一般的に言われるようになり、だれも異論を唱えることはなくなった。このことは、「幼児期の遊び」の理解に対して追い風となっている。さらに、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に「幼児期の終わりまでに育てたい姿」「育成すべき資質・能力の3本柱」が明記された。この言葉が小学校への接続、連携を一層強化する共通の用語として理解されることになり、とても良いことだと考える。しかし、日本における「幼児期の遊び」の社会的理解度はまだまだのように感じる。また、子育て支援についても、保護者の立場で語られていることが多いように感じる。今の子育て支援は、子育ては大変なことであるとするマイナスのイメージを強く社会に与えているように思われて仕方がない。

一方で「待機児童対策」に躍起になって、保育者不足が取りざたされている。増やす努力をしなければならぬが、質の高い遊びを支援、展開する保育者は促成栽培のように育てることはできない。また、今の子どもたちが夢中になって遊びに取り組んでいるかといえば、必ずしもそうとは言えない保育現場の実態がある。いろいろな園があり、様々な保育がある中で、「保育の質の向上」が大事といわれる今この時に、子どもが生きる、子どもが遊ぶという教育・保育の根幹が揺らいでいるようにも見える。

しばらくはこの状況が続くであろうが、「子ども不足」の時代がやってくると予測されている。そうすると、いずれ「幼児教育施設の淘汰」の時代になるのではないだろうか。そのような流れの中でも、保育実践者として生き続けようとする保育者の養成のために、授業改善の努力を続け、努めていきたい。

(きむら ひでみ 初等教育学科)